

地域に学ぶ



MINAMI
SANRIKU
PROJECT



TOGA
PROJECT



過疎化、住民の高齢化、産業の衰退が「地方」の大きな問題になっていきます。そうした「地方」の生活に溶け込んで、共に暮らし、共に考え、共に行動し、つながりを築こうとする塾生たちがいいます。彼らは、日本のさまざまな地域での活動を通じて何を学んでいるのでしょうか。

口永良部島プロジェクト

島を学校、島民を先生として学び、都会と離島を結ぶ——環境情報学部 長谷部葉子研究会

今年5月29日、口永良部島くちのえらぶ（鹿児島

県屋久島町）の新岳しんたけが大規模噴火をし、現在、約140名の島民全員が屋久島などで避難生活を送っています。

2010年に長谷部葉子准教授と有志の学生が、口永良部島を初訪問。11年には「教育」をテーマとする同研究会が他の研究会を巻き込み、口永良部島とSFCによる協働プロジェクトを発足させ、時間をかけて島民との深い

信頼関係を築き上げてきました。

「便利な都市部に生まれ育った学生たちには、『今、ここにあるもの』や、『人とのつながり』を生かして、たく

ましく生きることへの想像力、行動力が欠けがちです。しかし、島には自分で考え動かなければ何もできないという、生活の原点があります。そのことに気づいた学生たちは、島を学校に、島の人を先生にして、夏休みの長期合



環境情報学部 准教授
長谷部葉子はせべようこ

宿のみならず、時間をつくっては数日間島に滞在し活動しています。プロジェクトでは築130年の古民家を借りて、島の人の厚意で自宅にも宿泊させていただき、学生たちはそのお返

KUCHINOERABUJIMA
PROJECT



しに草刈りや、土砂崩れで埋まった温泉の復旧作業を行ったり、子どもたちの勉強を見たりします。お金で解決できないことの多い島の暮らしでは、自分たちで何でもやらなければなりません。草刈りでも農作業でも自分たちがいちばん下手なことを実感させられる日々です。それでも、いろいろお手伝

● 1年間の口永良部生活で学んだこと

僕は2年の秋から1年間休学して、口永良部島に移り住みました。

僕たちなりに、島と都会を結ぶ活動に真剣に取り組んでいましたが、その意味が島の人にはなかなか伝わらず、「それが何？島のことにどれだけ本気なの？」と問われると口永良部も自分もいました。それも当然。島民の皆さんは365日島で暮らし、島の将来に期待

いをしていられるうちに少しずつ認めていただき、島の活性化について心を開いて深い話ができるようになりました」
(長谷部准教授)

学生たちは当初、自動車教習所をつくるなど外部目線のビジネスプランを考えましたが、島のことを知れば知るほど、島と都市部をつなぐ懸け橋になり、島をサポートすることが大切であるという気持ちが強まったそうです。長谷部准教授も学生たちとともに、教育面から地域活性化に貢献できるような企画を練りました。

その一端として、2012年には都市部の高校生・大学生約50名が島に2週間滞在するスタディツアーを実施。島の人と共に、地元食材でのジャムづ

と同時に強い危機感を抱いているのに、授業として、あるいは夏休みの短期間に来るだけの僕たちに、島の現実がわかるのだろうか？これでは対等に話ができないと、学生の覚悟を示す意味で1年間住むことにしました。

島では「慶應ハウス」と呼ばれている古民家で自炊しながらの一人暮らし。若手のリーダーの方が経営している運送会社で、宅配

くりなどを通し、ストーリーマーケティングの切り口から島の魅力を伝え、都市部への販路開拓やさらなるスタディツアーのカリキュラムデザインを模索しています。

「教室で学んだ理論は、現場で一度全部つぶされます。その経験こそが大切。後に力強い理論が再構築されます。プロジェクトの卒業生の進路は金融、行政関係など多岐にわたります。現場の経験からお金の流れや行政の重要性を知るでしょう」(長谷部准教授)

研究会では現在、全島避難中の島の人々の支援を目的に「口永良部島ふるさと支援プロジェクト」を立ち上げ、応援メッセージ、復興アイデア、支援金を募っています。



環境情報学部4年
とみながしんのすけ
富永真之介君

便と郵便物の配達のアルバイトをしました。最初は失敗も多々あり、孤独感とふがいなさが重なって、島の人間なのか、慶應義塾の学生なのか、自分の立ち位置がわからなくなっ

たこともあります。そんな僕を見ていた勤め先の社長やご家族からは、「困ったことの相談もせず、うれしいこと、悲しいことも共有しないのはおかしいよ」と言われました。その言葉に、中途半端はやめて、島民になりきろうと決めました。

今年5月の噴火の前、昨年8月の噴火の

● 大学を飛び出し、地域づくりを学ぶ

私は、2014年9月から屋久島に約1年間滞在していました。そして、地域に飛び込み「大学生」としてできることを探求し挑戦していくために、同年10月から屋久島町役場インターンシップ生、今年の4月より臨時職員となり、主に地方創生事業の事務補佐として就業体験をさせていただきました。

就業体験をするに至った経緯は、2年生の春から関わってきた口永良部島でのフィールドワークにあります。島で暮らすことは、地域を支える仕事と伝統行事に携わり、直面する課題と向き合うことでした。人口約135人という小さな社会で子どもからお年寄りに接し、私もその社会の一員として活動する中で「こうやって地域はつくられているのか」と、心を揺さぶられました。屋久島長期滞在中に、住民の声が集約され、地域づくりの計画を打ち立てる場所に腰を据えて活動したい

き、その噴煙に世界の終わりじゃないかというくらい恐ろしい思いをしました。島にいた学生や旅行者が翌日の船で島を離れるとわかったものの、島の人と行動を共にしようと思った。その後、島の人も自主避難を決めました。一緒に島を離れましたが、残留決断のときの僕は、慶應人ではなく、島の人になりきって

と思うようになり、口永良部島プロジェクトでの活動においてご指導、ご協力くださった屋久島町役場に就業体験をお願いしました。

私が所属していた企画調整課は、町のあり方や方向性を決めるための事業計画を立て、予算を調整していく部署です。役場での仕事は、地域住民の生活に非常に近く寄り添ったもので、一つの事業の継続、創出において住民の想いをどのように反映し、生活を支えていくのかについて考える日々でした。その中で



屋久島町住民と「口永良部島のこれから」について語り合う様子

私は、他地域事例を収集・分析したり、わかりやすく事業のモデルを資料にまとめたりして、事業の質を高

いました。自らの立場を踏まえ、腰を据えてしっかりと考えるたくましさこそ、口永良部島での学びです。そしてより多くの学生にこの学びを経験してほしいと思っています。今後もプロジェクトの活動を通じて島の方々と一緒にできることを模索していきます。



環境情報学部4年
ながよしゅうた
永由裕大君

める役割を担うことができました。そこで得た知識や経験を口永良部島プロジェクトに反映させ、大学の取り組みを行政や地域の方々に示すことを実践してきました。

長期滞在中、島民の方から「新しく考えることが多くなった」「どんどんやってほしい」とお声がけいただき、新しい学びを貪欲に吸収する「大学生」という存在が地域づくりに刺激をもたらしていると感じました。今後、口永良部島プロジェクトは、大学内で行われてきた学びの場を地域の現場にも置くことで、大学での教育・研究と地域社会との交流を通し、障壁なく自由に学び合える場づくりを目指していきたいと考えています。



福岡市という南三陸町のお祭りのお手伝い
をしているところ（2014年8月）

きました。
現在は、震災以前から保有している慶應の森を活用して復興に役立てられない

か考えており、森の整備や道づくりを行っています。
この活動を4年通して学び、感じたことは2つあります。1つ目は自分たちがどのような形で町に携わっていくかということ。復興に寄り添い活動を続けていく中で、学生一人ができることの限界や意義については現地にいくたびに考えました。現地の方々ができることは現地の方が行うべき、というスタンスの下で自分たちができること、すべきことを常に意識して取り組んできました。その一つの答えが森での活動です。慶應の森というわれわれが保有するリソースを活かすことで、現地の方々の雇用を奪うことなく意義のある活動ができればと考えています。森を整備することで海に良い影響を与え、漁業の活性化に役立てることができ、今後は森そのものを観光や学びの場として人が集まる場所

にしていきたいです。
2つ目は南三陸町の魅力を多く知ることができたことです。海の幸はともおいしく、現地の方々にはいつも温かく迎え入れてもらい、第2の故郷に帰省するかのよう活動をしていきます。行くたびに歴史や文化に関して新たに学ぶことがあり、こうした南三陸町の魅力を多くの参加者に知ってもらいたいという思いで活動に臨んでいます。震災から時間が経過した今でも初めて訪れ、魅力に気づくことで継続的に参加する学生も多く、このような形で南三陸町と慶應義塾のつながりをこれからも大切にしていきたいです。

南三陸プロジェクト
私と南三陸町の継続的なつながり

2011年の東日本大震災により大きな津波被害を受けた宮城県南三陸町。その年の夏から、有志の教員、および塾生が参加し、復興支援のボランティア活動として始まった南三陸プロジェクト（開始当時の名称は「南三陸支援プロジェクト」）については2012年冬号でも取り上げましたが、その後について、当初から参加している廣田君に寄稿してもらいました。

私自身は2011年の夏に初めて南三陸町を訪れてから、現在に至るまで2〜3カ月に一度のペースで現地に行き、活動をしています。2011年当時は瓦礫の片づけといった復旧作業から、仮設住宅でのお茶っこ（お茶会）やベンチ作成といったコミュニティ活性化の活動に携わりました。あれから4年が経ち、ライフラインは復旧し、震災に強い街づくりのために土地のかさ上げが進んでいます。南三陸町の基盤産業である漁業も次第に活発になり、ボランティアへのニーズも変わって

か考えており、森の整備や道づくりを行っています。
この活動を4年通して学び、感じたことは2つあります。1つ目は自分たちがどのような形で町に携わっていくかということ。復興に寄り添い活動を続けていく中で、学生一人ができることの限界や意義については現地にいくたびに考えました。現地の方々ができることは現地の方が行うべき、というスタンスの下で自分たちができること、すべきことを常に意識して取り組んできました。その一つの答えが森での活動です。慶應の森というわれわれが保有するリソースを活かすことで、現地の方々の雇用を奪うことなく意義のある活動ができればと考えています。森を整備することで海に良い影響を与え、漁業の活性化に役立てることができ、今後は森そのものを観光や学びの場として人が集まる場所

にしていきたいです。
2つ目は南三陸町の魅力を多く知ることができたことです。海の幸はともおいしく、現地の方々にはいつも温かく迎え入れてもらい、第2の故郷に帰省するかのよう活動をしていきます。行くたびに歴史や文化に関して新たに学ぶことがあり、こうした南三陸町の魅力を多くの参加者に知ってもらいたいという思いで活動に臨んでいます。震災から時間が経過した今でも初めて訪れ、魅力に気づくことで継続的に参加する学生も多く、このような形で南三陸町と慶應義塾のつながりをこれからも大切にしていきたいです。



慶應の森での活動（2014年11月・集合写真一番手前左が廣田君）

富山県南西部、岐阜県に接する南砺市利賀村は、高い山々に囲まれた過疎地域。しかしながら、1980年代には世界演劇祭を開くなど、村の外に向けてオープンなマインドを持つ地域です。

主に都市部から利賀村に通う社会人・学生が連携し、さまざまな活動をする「利賀ゼミ」が2009年頃からあり、そのメンバーと牛島利明教授が知り合ったことが、「利賀プロジェクト」誕生のきっかけになりました。

2011年の夏休みには研究会全員が利賀で合宿し、翌年度から、利賀に興味を持った数人の学生たちが利賀プロジェクトを立ち上げ、本格稼働しました。

牛島研究会は、産業史・経営史を研究対象にするゼミです。その研究課題のひとつは、いま現在の問題の歴史的背景を読み解くことであり、そのためにはさまざまな社会の現実をその土地に行き知ることが重要で、その基本は丹念なフィールドワークです。研究会には現在4つのプロジェクトがあり、そのうちのひとつである利賀プロ



春祭り 坂上地区の獅子舞に参加

え、実際にやってみようとするものです。

プロジェクト活動は、授業時間外の自主的なもの。すべて学生たちによって立案され、実行されます。牛島教授はそのミーティングの議事録をチェックはしますが、あくまで見守りのスタンスでいます。

「プランが甘いな、うまくいかないだろうなと思っても、相手に大きな迷惑をかけそうでなければ、極力口を出しません。失敗も大切な経験なのです。それをもとによりレベルの高い計画を作り直すことができますから」(牛島教授)

利賀プロジェクトの今年のテーマは「見つけて、届ける」。村の人や村に関

わる人たちのインタビュー動画を配信し、地域の産品をネット販売する「利賀村のギフト」の実現を目指しています。

「学生たちは、同世代の人間に囲まれ、同じ教室で学び、サークルの仲間と付き合うという均質な環境で日々暮らし、狭い世界で完結してしまっています。利賀に限らず、学外に出ていくと、さまざまな世代や職業の人と出会います。異なると話や行動を通して交流します。異なる世界を見て、学生と教員以外の人と接することで、教室の学びとは異なる貴重な経験ができます。大切なのは、その学びを持ち帰って、皆と共有することです。牛島ゼミでは、論文の作成や教室での議論など、オソドックスなゼミ活動もあわせて行っています。プロジェクティブ活動とあわせ、自ら考えさせる教育を行っていきたくと考えています」(牛島教授)



商学部 教授
牛島利明

● 利賀の魅力を「見つけて、届ける」

——利賀プロジェクトのメンバー、中山拓哉君と中村香穂君に聞きました。なぜ利賀プロジェクト（以下、利賀プロ）に入ったのですか？

中山 以前から故郷の魅力を発信できたらと考えており、地方に興味がありました。地域産業の研究をする牛島ゼミに入ったのも、地方のフィールドワークができる利賀プロに参加したのも、僕にとっては自然な選択でした。

中村 もともとフィールドワークをやりたいたの思いがあり、牛島ゼミに入りました。利賀プロに参加したのは、過疎と呼ばれるがゆえに地域の人と人のつながりが強いのではないかと。学生の間に一度、人間関係が濃密そうな土地を知りたかったのです。

——活動を通じて、どのようなことを感じましたか？

中山 都会の人には、限界集落などと呼ばれる村は、活気がなく、いずれなくなるのだろう、などと思われがちです。しかし、1年以上通っていると、村にも確実に人々の力強い営みがあり、都会にはない人の交流があることがわかります。たとえば“寄り合い”の文化。月に1回、村人が集い、村の将来やこれからの方針を話し合います。膝と膝を突き合わせて、意見を言い合う姿は新鮮でした。この文化を発信しようと、港区の公民館を借り

て模擬寄り合いを企画し、利賀村を知る人たちを集めて、獅子舞の存続などについて話し合ったこともあります。

中村 人口は少なくても、コミュニティが機能していて、さびれた印象はありません。昨年はツアー班として、都会の学生を利賀に連れていき、村の人の協力と指導で、味噌作りやわら細工、地産野菜でケーキを作ったりしました。皆さんフレンドリーで温かい。伝統のある村でありながらも、外部の方を抵抗なく受け入れてくださるのはすごいことだなと思います。

中山 ただ、長く通っているがゆえに、もどかしさを感じることもあります。たとえば、村内外のいろいろな立場の人が地域活性化と人口増に取り組んでいるのですが、ゴールは同じでも手法が異なり、なかなか成果が上がりません。そんな意見調整の難しさを知った



民謡体験

のも、学びのひとつだと思えます。また、冬に備えての雪対策などに忙しい村の事情を考慮して、村の人のスケジュールに合



昨年の夏合宿にてなめこ栽培の準備

わせて動かなければなりません。学生ベースではなくて、相手に合わせることを学んだことも、収穫のひとつです。

中村 私も村の魅力が十分に伝わっていないというもどかしさをとても感じ、もっと伝えられるように活動がんばりました。インタビュー動画を撮る活動もそのひとつで、多くの方とお話しながら学ぶことも多かったです。今年は、魅力を伝える活動のひとつとして、利賀村のギフトを売るプランを立てました。ネット上で出資金を募るクラウドファンディングを行い、特産品をカタログギフトにすることを目指しています。



商学部4年
なかむら かほ
中村香穂君



商学部4年
なかやま たくや
中山拓哉君